

○現代語訳について

訳出に際しては、学術上の知見に照らしてなるべく正確な訳文となるよう心がけた。つまり、現代日本語の文章として文学的に洗練されたものをめざしてはいない。意訳を避け、原文の語順もなるべくそのままとなるよう努めている。ただし、あまりにも意味がとりにくくなってしまいうような場合は、その限りではない。また、以下のような原則にもとづいている。

- 一 時制、待遇表現などは、できるだけ原文に近くなるよう努めた。なお、地の文の文末をすべて敬体（いわゆる「ですます」体）で訳すことはしない（本書の解説を参照されたい）。
- 二 作中人物の呼称については、原則として当該部分前後の原文にみえる呼称をそのまま訳文の中でも用いることとし、適宜（ ）内に通称を添えた。また、原文では多くの場合主体が明示されていないが、訳文ではこれを適宜補った。
- 三 作中人物の心内の言葉は、明確に当の人物の心内の言葉としてくれる場合と、そうではない場合（語り手もしくは書き手の言葉としてもとらえる場合）とがある。本書の現代語訳では、試みに、前者の部分には実線の傍線を付し、後者の部分については点線の傍線を付した。ただし、特に後者については微妙な部分が多く、異なるとらえ方もありうることを認めなくてはならない（本書の解説を参照されたい）。
- 四 現代語訳は、陣野英則（桐壺↖総合）、山中悠希（薄雲↖若菜下「二二」）、有馬義貴（若菜下「二八」↖椎本）、中西智子（総角↖夢浮橋）の四名で分担し、全体を陣野が調整した。

※ 読解の便を図るため、広汎に流布する『新編日本古典文学全集』全十六卷（小学館、一九九四～一九九八年）の章段落号を、本文・現代語訳のいずれにおいても小見出し（巻名のあと）に示しておく。

目次

凡例……………3

本文・注釈編……………9

現代語訳編……………179

※上段の頁が「本文・注釈編」に、下段の頁（ゴシック体）が「現代語訳」にそれぞれ該当する。

| | | |
|----------------|----------------|----------------|
| ①桐壺「一」……………11 | ②桐壺「二」……………12 | ③桐壺「四」……………14 |
| ④桐壺「一二」……………16 | ⑤桐壺「二二」……………17 | ⑥帚木「一」……………18 |
| ⑦若紫「一」……………19 | ⑧若紫「九」……………20 | ⑨若紫「二三」……………23 |
| ⑩若紫「二四」……………25 | ⑪紅葉賀「二」……………28 | ⑫須磨「一二」……………30 |
| ⑬須磨「二五」……………31 | ⑭須磨「一八」……………35 | ⑮須磨「二二」……………37 |
| ⑯明石「二」……………40 | ⑰明石「四」……………42 | ⑱明石「八」……………44 |
| ⑲明石「二二」……………49 | ⑳落標「四」……………50 | ㉑総合「八」……………52 |
| ㉒薄雲「二六」……………55 | ㉓薄雲「一八」……………57 | ㉔少女「三三」……………59 |
| 211 | 213 | 214 |

ど、かたじけなき御心はへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなれば、事ある時は、なほ扱より所なく心細げなり。

②桐壺 二

初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おほえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづ参う上らせたまふ。ある時には大殿籠おほとのこもり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子みこ生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊みにも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり、

と一の御子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭かげをば頼みきこえながら、落としめ疵きずを求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

御局は桐壺なり。

あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれ、と御覧じ

②桐壺 二 光源氏誕生

○初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき―源氏の母となる更衣は、帝のお側にお仕えして、常時身の回りの世話を勤めた。本来は典侍・掌侍・命婦ら女房の仕事。○さるべき御遊びの折々―管絃の遊びの折々。「長恨歌」「承歡侍寝無閑暇春従春遊夜専夜―欲を承け寝に侍して閑かなる暇無し春は春の遊びに従ひ夜は夜を専にす」(白氏文集、卷十二、感傷、五九六)を踏まえる。

○大殿籠もり過ぐして―「長恨歌」「春の宵短きを苦しみ、日高けてより起く。此より君王早朝せず」を踏まえ、共寝の後も朝務を疎かにして更衣を侍らせている。

○坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり、と一の御子の女御は思し疑へり―弘徽殿女御の心内。坊は東宮坊。疑心暗鬼の状態を語り手が推測して語る体裁。

○疵を求めたまふ人―「紫明抄」「なほき木に曲がれる枝もあるものを毛をふき疵を言ふがわりなさ―直立する木でも曲がった枝はあるものなのに、髪の毛を吹いかき分けてまで疵を探し出すなんてなんて不合理なことだ」(後撰集、雑二、一五六、高津内親王)「有司毛を吹きて疵を求む」(漢書、中山靖王伝)。

○御局は桐壺なり―こまでが更衣の物語であるという、一応の擱筆。「桐壺」淑景舎の通

称で、帝の日常起居する清涼殿からは最も遠い東北の隅にあった。

○ひまなき御前渡りに―帝が、女人達の前を、いつもいつも素通りして、もつとも遠いところにいる更衣の許に向かうことを言う。

○げにことわりと見えたり―後宮を取り巻く人達の心内に語り手が同化した語り。

○参う上りたまふにも―桐壺更衣が帝のもとに参上するというので、の意。帝の寝所に伺候するための参上であるための敬語。

○あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり―女人達は嫌がらせをし、廊下に汚物を蒔いて衣裳を汚し、更衣が帝の許に向かうのを妨害した。○はしたなめわづらはせたまふ―女御たちが示し合せて、馬道などの戸に鍵をして桐壺更衣を立ち往生させ、「わづらはせ」た。

○事につれていとどあはれ、と御覧じて―叙述視点は、更衣の俯瞰的な描写から、帝の心内へと移行し、さらに全知視点へと戻る。